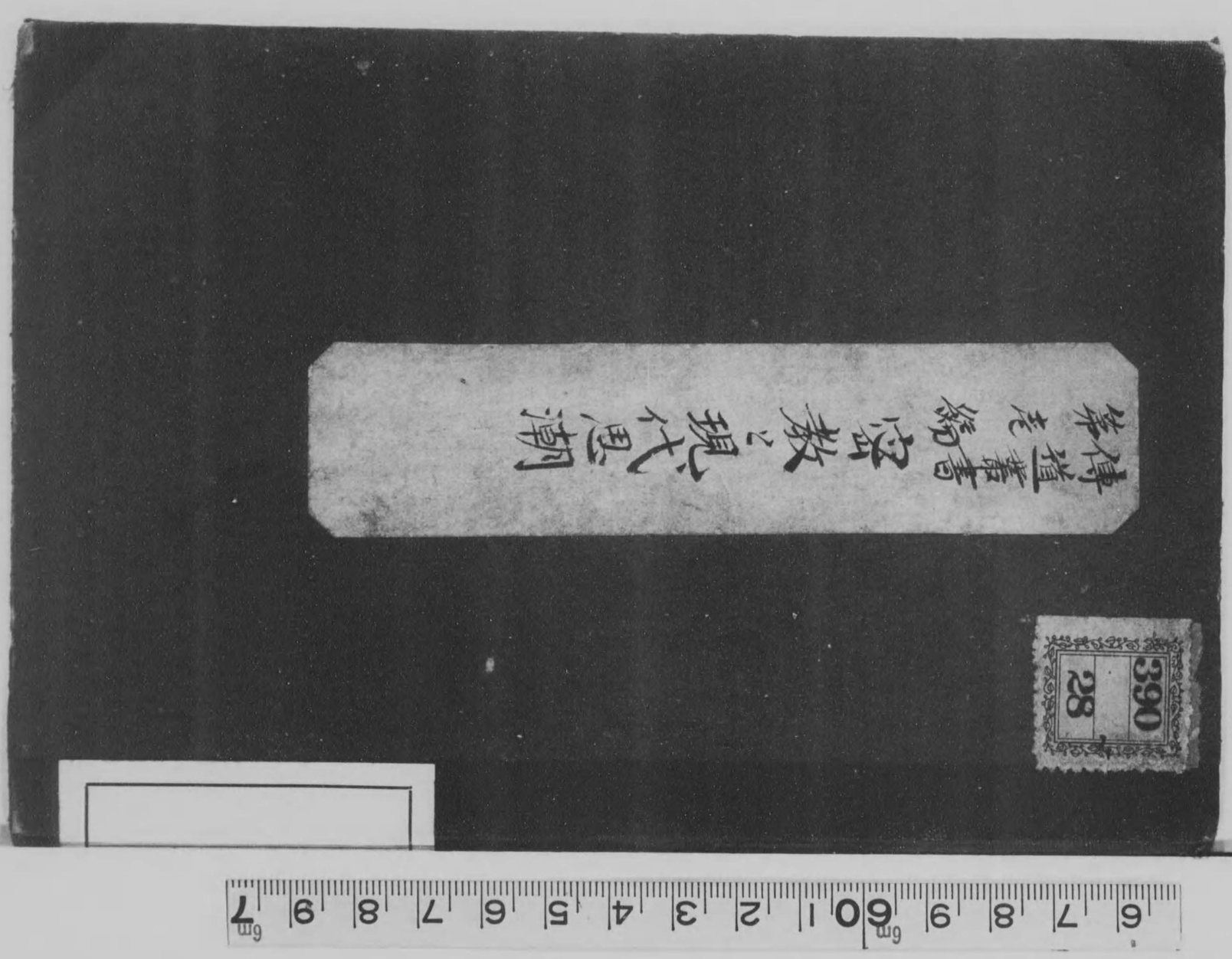

傳道者
說教
現代潮

480

傳道叢書第一編

密教と現代思潮

露光量違いの為重複撮影

本書は大正八年六月本派宗務所に開設せる第五回傳道講習所に於ける講演の筆記なり

茲に之を刊行し一般教化の資に供す。

豐山派宗務所教學部

390-28

密教と現代思潮

豐山大學長　加藤精神

今回傳道講習に付て私に何か話をするやうにと云ふことでありまして、取敢ず密教と現代思潮と云ふやうな風の御話をすると申上げて置きましたが、現代思潮は先日來、講習せられて、殆ど其事に付ては私共よりも諸君の方が先生になつて居られる譯でありますから、本日の御話は主として密教の宗意と云ふことに付て申上げた方が宜からうと斯う思ふのであります。

平密 5
交 3.
内 9.

それで高祖大師御一代の著書の中に就きましても宗意安心に屬する方の御書物と云ふものは先づ即身成佛義を措いて他には無いと云つても差支ない、其他のものは多く

露光量違いの為重複撮影

本書は大正八年六月本派宗務所に開設せる第五回傳道講習所に於ける講演の筆記なり

茲に之を刊行し一般教化の資に供す。

豐山派宗務所教學部

390-28

密教と現代思潮

豐山大學長　加藤精神

今回傳道講習に付て私に何か話をするやうにと云ふことでありまして、取敢ず密教と現代思潮と云ふやうな風の御話をすると申上げて置きましたが、現代思潮は先日來、講習せられて、殆ど其事に付ては私共よりも諸君の方が先生になつて居られる譯でありますから、本日の御話は主として密教の宗意と云ふことに付て申上げた方が宜からうと斯う思ふのであります。

それで高祖大師御一代の著書の中に就きましても宗意安心に屬する方の御書物と云ふものは先づ即身成佛義を措いて他には無いと云つても差支ない、其他のものは多く

交 密 5
内 3.

判教門の方の御書物でありますからして、安心と云ふことには幾らか皆緣が違いやうでありますが、即身成佛義は御著述の中に於て特に宗意安心の骨目を御示しになつたのでありますから、それを拜見すれば自ら眞言密教の宗意安心が分るのであります。

そこで即身成佛義の骨目はどこにあるかと云ふと、六大無尋の二頌八句の文に書て在るのであります、それでありますから本日は此二頌八句の文の大要を御話申上げたいと思ふのであります、從來六大のことを說いた書物もあり安心のことを書いた書物もありますが、多くは既に能く宗意に通じて居る人の爲に說いたやうなものであつて、初心の人に精しく順序よく說明したものはどうも無いやうでありますから、本日は幾らか分り易く其の事を御話申したいと斯う思ふのであります。

二頌八句の文は皆さん御承知でありますが、話の都合上こゝに書いて、簡單に御話を致します、其の二頌八句の中の初めの句は、

六大無尋常瑜伽（體）　此の六大は諸君も十分御承知でありますけれども、幾らか易話の分りいやうに書いて御話を致します。

地　阿　本　不　生　黃　方　堅
水　嚩　離　言　說　白　圓　濕
火　囉　無　垢　染　赤　三角　煖
風　訶　離　因　緣　黑　半月　動
空　佉　等　虛　空　青　團形　無尋
識　吽　了別不可得　雜色　雜形　了知

是は何處にも書いてあることで、皆さん能く御承知のことでありますが、此の六大を古來說明したもので初心の人に分り易く出來てゐるものを、私は未だ見ないから、こゝで初心の人の爲に簡單に御話を致したいと思ふ。

眞言宗で立てる此六大緣起論は一見、多元論のやうに見えるのである。地水火風空識

の六大と云ひ或は色心の二つと云ふ、それが即ち森羅萬象の能生である。根本の體性であると斯う言ひますが、從來の書物では其説明がチョット見ると多元論のやうな風に見えるのである、縱ひ多元論でないと云ふことを特に斷つてあつても、其書いてあることが一向徹底してゐない、それでありますから多くの人が誤解するのであらうと思ひます。此の六大緣起と云ふことを能く理解しやうと思ふのには何うしても其の根本の大日經及び疏の中に書いてある阿字本不生と云ふことが能く分らなければならない。

此の阿字本不生と云ふ事も諸君は殆ど耳に胼胝の入るほど聽いて居るし又聽かされて居るのでありますから、諸君も自分ではさう云ふ事は能く知つて居ると思ふ人が澤山あらうと思ひますが、段々聞いて見ると多くは正確には知つて居ないのであります。

阿字本不生とはどう云ふ事を謂ふのであるかと云ふと、是は阿字と云ふことが本でありますが、阿字と云ふことは印度の言葉の字の本である、阿と云ふ言葉があつてさうして總ての言葉が出來て居る、それであるから阿字を以て總ての字の能生とするのであります。例へば我々が斯うやつて種々の聲を出し種々の言葉を出すけれども、其言葉の本は息である、息が無ければ言葉は無い、其息を音聲として言ふと阿と云ふ音である、今口を任運に開けて息を出せば必ずアーと云ふ聲が出るのであります、詰り此阿と云ふ聲は我々の息である、其阿と云ふ息が出て來るのを或は齒を以て、或は咽喉を以て或は舌、或は唇、或は鼻で種々、屈曲せしめるからイ、ウ、エ、オ等の種々異つた音が出て來るのである。詰り阿と云ふ音は總ての音の本で總ての字の能生である。それだから本來阿字には能生の義がある。それで之を地大と云ふのは、土地は草木等を生ぜしむる所依處であり、能生であるから、阿字が地大の種字になつて居るのである。

それで此能生の阿字がどうして本不生と云ふことになつたかと云ふことを考へなければならぬ、宇宙の森羅萬象は斯の知くに種々に異つて居るけれども、其出來た本を繹ねて見れば、佛教から云ふと皆因緣に依つて生じたもの、因と緣とに依つて差別の萬有

は出來て居るのである、人間であらうが畜生であらうが乃至一切の物が、因緣に依つて生ぜざるものは一つも無い。其れであるから佛敎では生と云へば即ち因緣生と云ふことである、因緣を離るれば何も無い。例へば此講堂でも種々の木であるとか、土であるとか、釘であるとか、硝子であるとか云ふやうな物を寄せて、さうして大工とか左官とか云ふ者の力を借りて出來たものであつて、其等の因緣を離して見れば家と云ふ一つの纒まつた個性は無いのである。それと同じことで我々の身體も色受想行識の五蘊が、因緣に依つて集まつて假に出來て居るのであつて。若し因緣を離れて觀すれば即ち一向に有情と云ふものは無い、即ち無自性である。是の如く因緣の本を繹ね、又更に其の本を繹ねても悉く因緣生である。總て因緣に依つて生じたものは皆無自性であると云ふことが大乘佛敎の通則であります、此の理を委しく說いてあるのが三論の敎義でありますが、詰り總ての物は因緣から生ずる、因緣から生じたものは無自性である無自性であれば空である、空であるから不生不滅である。だから阿字が萬音の本であつて、萬音が阿字から生ずると云つても、段々其の本を繹ねて行けば、悉く因緣に依つて生じたのであるから終に不生不滅と云ふことに歸着するのである。此不生不滅に歸着すると云ふことは何を意味するのかと云ふと、現象界の差別の事法の上に於ては生滅があるけれども、一たび不生不滅の眞理に悟入すれば、則ちそこに絕對不滅の眞理があるのである、其不生不滅の眞理を契證した者が卽ち佛となり、其眞理を知らざる者が凡夫と云ふことになるのである。それであるから此絕對平等の眞理は凡夫も佛も不二平等である、此の不二平等の位を顯敎では單に空と云ふ字を以て言ひ表はすのである。密敎でも亦空と云ふ字を以て言ひ表はすことがないではないが、其の空無相と云ふことは同時に一切の諸相を具足して居る、故に無相の相は相として具せざることなしと云ふのである。それであるから此の一切の相を具足して居る點からして亦は六大と名けたのである。

理窟を言ふとむつかしくなりますから、昔から譬を以て此の道理を說明して居る、

此譬を腹の中に入れて置いて六大を見れば能く分る。譬へば茲に一つの金で拵へた獅子がある、此金で拵へた獅子は眼もあれば鼻もあり、足もあれば尻尾もある、さう云ふ風に種々差別して居るが、此差別して居る所の獅子は其體は何であるかと云ふと、即ち平等無差別の金である。そこで金獅子の眼ならば眼はどうして出來たのであるかと云ふと、種々の因縁に依つて出來たのである、耳も亦種々の因縁に依つて出來たのであるが、實には其金獅子の眼と云ふ個性も耳と云ふ個性も無い、唯因縁に依つて暫く眼となり耳となつて居るものである。それであるから眼と云ひ耳と云ふものは其の實、無自性である。眼とか耳とか云ふものは、其體は一つの金である。それは、初めから眼でもない、耳でもない、即ち不二無相の金である、それを假に眼とか耳とか名づけて居る。其の眼や耳と云ふ差別の方面ばかりに執著して居るものが是れが凡夫であつて、其の金の實相に達した者を佛と云ふのである。そこで其眼や耳や足やが其金とどう云ふ關係をして居るかと云ふことを知らなければならぬ。金獅子の足ならば足を見ると、足は假に名けて足と云つて居るが、果して何處までが足であるかと云ふことを調べて見ると、其の足の全體が即獅子であつて、獅子の全體が即ち足である。又耳を調べても假にこゝまでを耳と名づけて居るが、更に其耳の實相を調べて見ると獅子の全體が即ち耳であることが分るのである。是は華嚴宗に說く所の事事無碍の眞理を譬へたのであります。

私の話が少しむづかし過ぎたかも知れないが。大體さう云ふ譯であるから宇宙の森羅萬象が即ち阿字本不生である、阿字本不生の理は即ち絕對不滅である。果して然らば諸法の本源は此絕對不滅の阿字本不生で宜いのである。けれども、唯阿字本不生と言つて置くと、或は顯敎で謂ふ廓虛無物の空理と間違へられる處れがあるから、それで弘法大師は更にそれを名けて六大と云はれたのである。併し六大と云つて六つのものが別々にあつて、それが各別に活動して居ると云ふ譯ではない、此六大と云ふことも亦丁度金獅子の眼や耳や足や尻尾と云つたやうなもので、此天地間の萬有を、堅濕煖動無

礙了知の六つに別けたのであるけれども、それは一つの阿字本不生の理を斯う云ふ六つの方面から名けたものに過ぎないのである。それであるから我宗の六大緣起論は決して多元論ではく、地大の一を擧ぐれば法界悉く一の地大となり。水大の一を擧ぐれば法界悉く一の水大となり。乃至識大の一を擧ぐれば法界悉く一の識大となること猶ほ彼の金獅子の耳や足やが即ち金獅子の全體であると云ふのと同樣である。之を擧一全收の六大と云ふのであります。此の擧一全收の六大が分らなければ次の無尋常瑜伽と云ふことも分らないのである。此の擧一全收の六大は佛も凡夫も更に異る事なく常に互相に圓融無尋である。之を無尋常瑜伽と云ふのであります。併しながら此の無尋常瑜伽の理も前に金獅子の譬を以てお話し致しましたやうに、我々や佛樣やを皆搗き雜せて一つの團子にして初めて生佛不二と言ふのではない。我々と佛と皆悉く因緣に依つて各々異つた生活をし、異つた境遇に居つて而かもそれが常瑜伽であると云ふのであります。要するに大日經の阿字本不生の理を、弘法大師が地水火風空識と名けられたのであるが、他語を以て之を言はゞ大師は六界に事事無礙を懸けて六大と名つけられたのであります。之を譬ふれば一つの金獅子に眼である、耳である鼻である足であると云ふやうに種々の名があるが、其名を取り來つて直に本體の金其ものを呼んだ樣なものである。大師が此の阿字本不生の理に名けるに六大と云ふ言葉を持つて來られたのは甚だ深い意味のあることである。それで方圓三角半月等の形や、堅濕煖動等の德や、白赤黃等の色やが皆別々の物であると思ふと、六大無礙常瑜伽の理が分らないことになるのである。今言うた金獅子の眼や耳や足や尻尾やが、其儘金であり、金の上の假の名前であるが如く、方と云ひ圓と云ひ半月と云ひ團形と云ふも、皆悉く一つの阿字本不生の理に名けたものである。而して此阿字本不生の理即ち六大は、凡夫も佛も毫も異らないから常に瑜伽(相應)して居ると云つたのである。是は體大の方から凡夫と佛と其體が融會して居て不二であると云ふことを言つたものであります。それで此事を精しく御話すると段々と六ケ敷なりますけれども、大體、擧一全收の六大と云ふことを深く

知らなければ六大緣起論が分らぬと云ふことに御承知を願ひたいのであります。次に

四種曼荼各不離（相）　是は前の六大が法爾に緣起して萬有となり十界の法となる。十界と云ふのは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界であります。此十界を現象の方面から分つたのが即ち四種曼荼羅であります。是も込入つたことを言つて居れば時間が經ちますが、先づ普通に曼荼羅と云ふものゝ區別を言ふと、曼荼羅と云ふものは壇に畫いたものでありますが、今日は斯う云ふ風な掛物になつて居ります。今暫く此の掛物の曼荼羅で云へば諸佛の尊形の書いてある所の曼荼羅を大曼荼羅と云ふ。それから觀音樣の所に蓮華を置いてあり、文珠樣の所に劒が置いてある。さう云ふやうな劒であるとか、蓮華であるとか云ふ物だけを畫いたものが三昧耶曼荼羅である。三昧耶は即ち本誓の梵語で、文珠樣は智慧の劒を以て一切衆生の煩惱を斷破する誓願があるから、其誓願を標幟して劒を置く。或は觀音樣は蓮華を開かしめる、即ち我々が本來具へて居る佛性を開かしめると云ふ慈悲の本誓を表はして蓮華を置くと云ふやうに、本誓願を表はした物だけを畫いたのを三昧耶曼荼羅と云ふ。それから各尊の種子の梵字だけを書いたのを法曼荼羅と云ふ。それから之に異つて壇の上に、尊形を彫刻したり或は鑄物で拵へたり或は又塑像で拵へたりする、さう云ふ尊形を列べた所の曼荼羅を羯磨曼荼羅と云ふのである。是の如き四種曼荼羅は通常御經に說いてありますが、弘法大師が頌文の中に御說きになつた意味は、それをもう一層大きく解釋して、此地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、等十界の有情を大曼荼羅と云ふのである。諸君の身も私の身も此當體を大曼荼羅と云ふのであります。さうして我々の持つて居る書物であるとか、或は山川大地草木國土、斯う云ふ物を惣て三昧耶曼荼羅と云ふのである。それをなぜ三昧耶曼荼羅と言つたかと云ふと、我々人間には人間の本誓を標幟した世界がある。畜生には畜生の本誓を標幟した世界がある。それであるから世界の草木、國土、山川、大地も皆此れ三昧耶曼荼羅であると云ふのである。それから又十界の有情の總ての言語文字等、六塵の法は悉く法曼荼羅である。そ

れから又十界の有情の行住坐臥の四威儀が羯磨曼荼羅である。斯う云ふ風に宇宙の總ての物を四種曼荼羅に分つたのであります。又我々一個人に就て之を分てば亦四種曼荼羅がある。一個人の私の身全體が大曼荼羅である。こゝに書物があり机があり椅子がある、さう云ふやうな物は即ち私が今此處で御話をしやうと云ふ三昧耶を表はしたものである。それから私の姓名がある、又今御話してゐる種々の言葉がある、又自分が色々のことを考へる心がある、斯う云ふものが私の法曼荼羅である。それから私が手を組んで居る、俯いて居る仰向いて居ると云ふやうなことが總べて私の羯磨曼荼羅である。斯の如く亦佛樣にも四種曼荼羅がある。故に四種曼荼羅は、總べてのものにある。

それであるから我々凡夫も四種曼荼羅があり、佛樣も四種曼荼羅がある。詰り見て分つべき形、相の方から佛樣の四種曼荼羅も我々の四種曼荼羅も皆平等平等にして、各各相離れないと云つたのだある。是は相大の方から見て凡聖不二の理を說いたものである。それから

三密加持速疾顯(川)　と云ふことは即ち其作用を云つたものである。即ち上の體大相大の上に働く作用がある、是は十界の有情に皆身口意三密の作用がある、身で行ふ所の作用と、口で言ふ所の作用と、意で思ふ所の作用、此三つの作用がある、是は佛にも凡夫にもある、凡夫には三業と云ひ佛には三密と云ひます。けれども實を言はゞ即ち凡夫の三業も佛の三密と同じものであるから、こゝでは矢張り三密と云つて三業と云はなかつたのである。そこで體相二大の上に無尋不離がある如くに、作用の上にも佛樣の三密と、我々の三業とは不二である、不二であるから三密の修行をして、入我、我入の觀行を修して加持すれば、感應道交空しからずして、行者本具の佛德が速疾に顯れる、即ち吾人は本來、佛の功德を具足して居るから、其具足して居る五智四身の功德が速疾に顯はれるのである。是は用大から云つて佛と我々と異らないと云ふ凡聖不二の理を說いたものである。次に、

重々帝網名即身（無礙）　と云ふ第四句は、斯の如くに凡夫と佛と體相用の三大が互相に無尋融會して居る。それが即ち即身成佛の即身と云ふことであるぞと示されたのであります。

此の頌文を前の傳道講習の時に、私が試驗問題に出した所が、帝網と云ふのは魚を捕る網である、凡夫は常に網から脱がれやうとする、然るに佛は帝釋の網を以て掬ふのであると、斯う云ふ答案があつた、實に準司教も當てにならぬ、此重々帝網と云ふことはどう云ふことを言つたのかと云ふと、是の名目は華嚴の教理から來たのでありますが、印度では世界の眞中に須彌山と云ふ大きな山があるとしてある。此須彌山の頂上に帝釋天と云ふ天がある此帝釋天の所に五色の珠の網が莊嚴してある。其五色の珠の網は青い珠の中にも赤や黄や紫や種々の珠の色が映つて居る。又外の珠にも其通り種々の珠の色が映つて居る。其の映つて居る珠の中の珠にも、亦外の種々の珠の色が映つて居て、段々に其映つて居る珠の中に種々の色の珠が映り合つて、それが光線の工合で重々無盡になつて互に映り合つて居る。さう云ふやうな風に一切の佛樣と一切衆生と體相用の三大が丁度帝釋天の珠の網。珠の樣に、重々に相涉入して居ると云ふので、詰り凡夫と佛と一體不二であるから、それを重々帝網名即身と云つたのである。一切の佛樣も凡夫も打殺して一つの穴に入れて不二であると云ふのではない。それは帝釋天の珠の網々皆潰ぶして搗き混ぜてさうして不二であると云ふ意味でなく、赤い珠や青い珠が各々自分の相を壞はさずして、さうして各々他の珠の中に自分の色が映つて居る、さう云ふ意味で我々凡夫も佛樣も種々の因緣に依つて異つて居るけれども、其實相を諦ずれば重々帝網である。から即身と名けると斯う云ふことである。それで成佛と云ふことを說いて

法然具足薩般若　心數心王遍刹塵　各具五智無際智　圓鏡力故實覺智（成佛）

斯うある。是は成佛と云ふことで、本來我々は薩般若、即ち一切の智慧を具足して居る、我々は心王心所が澤山ある、其心王心所の各各に五つの智慧を具足して居る。

其の五つの智慧の各各にも亦五つの智慧を具足することであるから、無際智である。其無量の智慧を悉く我々は本來具足して居る。それが今の三密の修行に依つて現はれて、即ち大圓鏡智となる。大なる圓滿の鏡が總ての物を照して謬りなきが如く、眞實の悟を開くのが成佛であると云ふことを御釋しになつたのである。以上大體の事は諸君は元より御承知でありますが、眞言宗の宗意、安心は即身成佛である。此の即身成佛を弘法大師が即身義で二頌八句の文に約めて御釋しになつた、是が即ち眞言宗の骨目であると云ふことを簡單に御話をしたのであります。

そこで此即身成佛をしたのは誰がしたか、其人證は誰であるかと云ふ事に付て、如何に立派な即身成佛と云ふ教義であつても實際成佛した者が無ければ空論である。誰が成佛したのであるか我々は誰の芳躅を學ぶのであるかと云ふと、此の事に就て古來眞言宗の中にも種々誤解して居た人もあつたが、新義では賴瑜僧正が此の事を即身義顯得鈔に明瞭に書いて居る。其れに依ると即身成佛した人證は即ち釋迦牟佛尼である眞。

言宗から云ふと御釋迦樣は生れた時にはまだ凡夫であつた、それが城を踰えて修行をせられて、遂に菩提樹下に於て成佛せられた。それが即ち毘盧遮那佛と成られたのである。悉陀太子は淨飯王と摩耶夫人と云ふ父母から貰つた所の肉身を以て成佛せられたのである。我々眞言行者は、それを學ぶのであると說いてあります。それから此後には明瞭の人證は我が弘法大師であります。弘法大師が即身成佛をせられたことに付ては古い書物には種々誇大の形容がありまして、餘りに形容が多い爲に反つて其事實を疑ふやうな人もありますけれども、我々は弘法大師御自身が即身成佛の人證であると云ふことを堅く信じて疑はないのであります。

即身成佛と云ふことは、此の父母所生の肉身を棄てずして此身此儘成佛する事である。詰り我宗の安心は顯教のやうに三大遠劫の間、修行して成佛すると云ふやうな悠長なことや、未來に極樂へ往生すると云ふやうな事を排斥して我々の此の父母所生の肉身を棄てずに成佛する、即ち此の一生の間に人格を完成すると云ふのである。此國土を

棄てゝ外に淨土を求めないと云ふことは、近くは我が日本國土、遠くは宇宙間、何處でも我々の身を置いた所が極樂でなければならぬ。それが卽ち眞言宗の敎義であります。

それで弘法大師の御一代の事を簡單に申しますれば、弘法大師の理想は卽身成佛でありましたから、現在の我此の國家を棄てゝ外に極樂を求めると云ふ御考は毛頭ない。又此身を棄てゝ未來に極樂へ往生しやうと云ふ御考もない。それであるから弘法大師は御歸朝以後、專ら國家的事業に貢獻せられたのである。此の國家的事業に貢獻せられたと云ふのは、決して眞言宗を弘める爲め卽ち方便の爲にせられたのではなくして、其國家の爲に貢獻せらるゝと云ふことが卽ち弘法大師の密嚴淨土觀であります。卽ち此國家を密嚴淨土とする爲めの御努力であります。其中に種々の事がありましたけれども、先づ國家の爲に壇を建て法を修行せられたことは、弘仁元年三十七歳の御時に高雄山で御修行なされたのを初として御生涯の間五十一度であります。或は東大寺に於て、或は東寺に於て、或は神泉苑に於て或は宮中眞言院に於て悉く皆詔勅を奉じて御修法をなされたのである。さう云ふやうな譯であるから弘法大師の後半生は常に其事で以て終始せられて居る。弘仁十四年に、東寺を弘法大師に賜はると、直に東寺の名を改めて敎王護國寺と稱された。是は卽ち國家を擁護するのが密敎の本分であると云ふ意味で改められたのである。それから天長六年に、和氣淸麿の建てた神願寺を其孫の貞綱と云ふ人から大師に上つた、之れも直に名を改めて神護國祚眞言寺と稱せられた。是れは皆同じ思召であつて、國家の爲めに貢獻せらるゝことは密嚴淨土を莊嚴することであると云ふ思召から來て居る。それから綜藝種智院を立てゝ、普通敎育に盡くされたこと、伊呂波歌を作られたこと、五十音を作られたこと、(此の五十音は吉備大臣が作つたのであると云ふやうな說もありますけれども、梵語を知らたいものに出來るものでない、それは五十音が元、梵語の音聲學から出て居るのでありますから矢張り弘法大師の御作であると云ふのが正しいやうであります、且又、弘法大師が讃岐の萬農池、或ひは益田池等に付て非常に御盡力になつたことは、御承知の通りであり

ます。

其他、弘法大師が國家に盡されたことは枚擧するに遑のない程あります。其れに就いて此間、或人か弘法大師の尊王論を聞いたことが無いか、一體どう云ふ風になつて居るかと問ひに來ましたが、此の人等は、弘法大師の尊王論と云ふことに對して一種異つた考がへを有つて居られたやうであります。弘法大師の尊王論を知らうとするには弘法大師と天子樣との其の當時の關係を能く知つて居ないと分らない。弘法大師は平城天皇、嵯峨天皇、淳和天皇、仁明天皇、此の四人の天子樣に灌頂を御授けになつた、天子樣の御師匠樣である。俗の方から言へば君臣でありますけれども、法の方から言へば師弟の關係がある。それであるから普通の尊王論とは意味が違がひます。併しながら尊王と云ふことに付いては十分注意をせられて居る。それが普通の尊王論と違がふのは、元天子樣の御師匠樣であるからである。其のことは寶鑰の中の卷に、

夫所以建國設職、樹君御民、本非爲宰天下而供君主屠海內而給臣佐、當爲與天下之父母漉萬人塗炭、

此の秘藏寶鑰は天子樣に差上げる爲に、勅命に依つて製作せられた書物であります。其中に國家を建てゝ百官有司を置き、君を樹て民を御めしむる所以は、天下を煮て天子樣の御馳走に差出す爲めでない。又海內を屠つて大臣宰相に年俸を與へる爲めでもない。國家を組織する所以は、君王をして天下の父母と爲つて、萬民の塗炭を漉はしめむが爲めであると書いてある。さうして見ると弘法大師の此御考は詰り今日で謂ふ民本主義であつて、天子樣を大切にしなければならぬ、國家を大切にしなければならぬと云ふことは常に言はれてゞざるけれども、其意味は、元、萬民をして其堵に安んぜしめむが爲めに國家を組織し君王を樹てるのであると云ふことである。是れが即ち天子樣に上つた所の寶鑰に書いてある。さうして見れば弘法大師の天子樣に對する御考は單に普通の君臣だけの關係としては能く分らない、即ち師弟の關係があつて、常

に天子様の御考をして益々正しからしめむとする所の國師としての思召が現はれて居つたと云ふことが分るのであります。然しながら一面には君臣としての尊皇心も亦常に旺盛であつた樣である。それは彼の天長八年に大僧都を辭される時の御上表の文を拜見すると能く分るのである。

伏請陛下、賜顧臨終之一言、不棄三密之法教、生々爲陛下之法城、世々作陛下之法將、

どうか密敎を棄てずに弘通させて下され、さうすれば生れ代り生れ代つて、陛下の法城となり、世々に陛下の精神的將軍として活動を致しませうと云ふことを誓つて居られる。是が五十八歳で、愈々高祖大師が御入定を遊ばすの御決心をなされた時であります。生々に陛下の法城と爲り、世々に陛下の法將を作らむ、と誓はれたのは高祖の眞精神を吐露せられたのであります。斯う云ふ尊皇愛國の精神は、高祖大師の御一代に通じて顯はれて居るが、特に晩年に至りて著しく發揮せられた樣である。

それで六十一歳の御時に、御承知の通り、宮中に眞言院を立てゝ、陛下の玉體を加持し奉ると云ふ、即ち御修法の事を奏請して勅許を得られ、御入定遊ばされた六十二歳の正月に、後七日の御修法を御修行になつて、是が代々の恒例となつたのであります。高祖大師の尊皇愛國の精神は是く如くに晩年に至るに從つて、益々發揮せられて居ります。而して此れが皆、弘法大師の此土即密嚴と云ふことを實現せられる所の御努力に外ならないのであります。

「尙ほ弘法大師が、眞言密敎の目的は、父母所生の肉身を棄てず、即身成佛するのであると云ふ、此の父母所生の肉身に對する御處置、即ち弘法大師の御肉身に對する御處分は、此即身成佛の敎義と關係する所が大きいのでありますが、此事に付て先日、喜田博士が來て尋ねられたことがありますが、不幸にして私は不在でありまして御答をすることが出來なかつたから、こゝで簡單に其の話をして置きたいと思ひます。喜田博士の御尋ねの要旨は、

弘法大師の御かくれになつた當時の事について、續日本後記の中に天子樣の御悔狀が載つて居る。それに斯う云ふことがある、

眞言洪匠、密敎宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念。

是までは弘法大師の德を稱へたのであります。

豈圖、崦嵫未逼、無常遽侵、仁舟廢棹、弱喪失歸、嗟呼哀哉。

是は御悔の言葉でありますが、其の次に斯う云ふことが書いてあります。

禪關僻在、凶聞晚傳、不能使者奔赴相助茶毘、言之爲恨、悵恨曷已。

此意味を摘んで申しますると、高野山が餘りに邊鄙の所にある爲に、高祖大師の御かくれになつた凶聞が晩く傳つた。それが爲に朝廷から使者を遣つて、其當時の坊さんの一般の法式たる茶毘式を助けられる譯であつたが、訃音の傳はりが晩かつた爲に茶毘を助けしむることが出來ないのは恨であると、斯う云ふことである。弘法大師は茶毘即ち火葬にしたのである。さうして高野山が餘りに邊鄙である爲に朝廷から其火葬を助けることが出來なかつたのは遺憾である、と斯う書いてある。大師の入定留身と云ふ傳說と大層違つて居るのは何ふ云ふ譯かと云ふことである。成程、弘法大師が御かくれになつたのは、三月二十一日、御誄詞は三月二十五日でありますから、其間僅に五日しか經つて居ない、高野山へ勅使の來られたのは二十五日でありますから、此詔書を下されることになつたのは、まだそれより大凡二日ほど前であります。其時に、茶毘を相助くる能はず之を言つて恨とするとあるから、弘法大師は茶毘にせられたものであらう。生きながら入定せられたと言ふは、それは俗說であらう。天子樣の詔書の中に茶毘にしたと書いてあるから博士が大師は必ず火葬せられたものであらうと考へられたのも無理ではないが、是は全くさう云ふ譯ではない。續日本後記に出て居る御誄詞の中にさう書いてありますのは、其當時、坊さんが歿れば茶毘したのが普通である。それであるから朝廷の方でも御察しがよく、弘法大師が御かくれになつたのであるからして茶毘したのであらう、茶毘をするならばこちらから人を遣つて茶毘の助け

をさせるのであつたけれども、それが出來なかつたのは殘念であると云ふ御言葉で、高野山に此勅使が立つて來て見た所が、茶毘も何もした譯でないからして、其時、詔書とは事實が違つて居たのである。けれども其詔書は此通りになつて居たのであるから、續日本後記に其通り出て居るのであります。

それで高祖大師が御入定になつた有樣はどう云ふ風であつたかと云ふと、是も大切な事でありますから簡單に御話して置きます。高祖大師は天長九年、五十九歳の十一月十二日から全く五穀を召上らずして、凡て今の生身供のやうな物を召し上つて、專ら坐禪をしてござつたのである。是ほど深い御考のあつたことでありますが、それから承和二年まで、即ち六十二の御歳に至るまで其通りであつて、承和二年三月二十一日の寅の刻に御入定になつたのであります。此御入定になる時はどう云ふ風であつたかと云ふと、今日、奥の院に在る御廟所より、巽の方に向つて三丁ばかり山の中に行くやうに隧道が掘つてある。其奥に御廟所として三間四面の石室が拵へてある、此三間四面にせられたと云ふことは三六、十八尺であるから、是は金剛界の十八尊を標幟したものであると云ふことであります。それから中央に石の蓮華座がある、此の蓮華座は胎藏世界を標幟したもの、前の扉が三尺七寸、是は三十七尊に擬したものであります。大師は御生前にさう云ふ石室を造つて置かれた。さうして三月二十一日に御入定になつたのでありますが、其の前の三月十一日から、高祖大師は親から壇上に登られて、御弟子方が唵梅怛梨耶阿莎訶と云ふ、彌勒菩薩の眞言を十日間、毎日唱へて居られたが、其の三月二十一日寅の刻に御入定になつて、今まで眼を開けてござつたのが眼を閉ぢられ、今まで時々御言葉があつたのが、御言葉が無くなつたと云ふだけで少しも平生と異らなかつたのである。是が即ち御入定になつたのであります。それから六七、四十二日の間は、御厨子に御身體を入れて、御在世の時と同じく朝夕の御膳を差上げた。其御膳は眞然大德が差上げる役であつた、其時に差上げた御膳は、所謂はゆる生身供である。之を精進供と書くのは間違ひである。生身供と云ふ意味は、

御入定以前の生身の時の通りに供へると云ふことである。それ故、生身供は弘法大師に限るのである。即ち六七、四十二日の間、眞然僧正が差上げた御膳を指したのであります。次に五月三日に、彼の奥の院の石室の中に御納め申した譯である。其の後、種々の不思議な事跡なぞも傳らへれてありますが、定後八十六年を經て、觀賢僧正が、延喜帝から下された檜皮色の御法衣と、弘法大師の諡號の勅書とを奉じて、勅使と共に高野山に行かれて、進んで淨扉に近づいて見ると、大師樣の御髪が延びて御座つたからそれを剃つて、御法衣を御著せ換へ申して、其後に淨扉を永く開くことの出來ないやうに、石屋を呼んで閉ぢられたと傳へてあります。其髪の毛は三つに分けて、一分は延喜帝に差上げ、殘りは天后、勅使及び觀賢、淳祐等、其他信者達にも分つたと云ふことが舊記に出て居ります。元來、即身成佛と云ふことは、何も肉身を此土に留めることに限る譯ではない。一休禪師が燒けば灰、埋めば土となると云つたのも、固より即身成佛でないとは云へないのである。併ながら弘法大師が、特に肉身を留めて置かれたのは、甚だ深遠なる思召のあつたことで、眞言密敎を後世に流傳するに付て、重大なる關係のあつたことであります。

それから弘法大師の御入定後に興敎大師が出世して、弘法大師の遺業の中で漸く衰へた所のものを再び興隆にせられて、高野山上の種々の弊害を除いて大改革を行はれたことは御承知の通りであります。

然るに興敎大師の安心のことに付て一言申上げたいと思ふことは、興敎大師の順次往生と云ふことであります。此事は鷲尾君も何か御話があつたかと思ひますが、順次往生を多分、淨土門の未來往生と同じ樣に解釋されたことゝ私は想像するのである。併し興敎大師の順次往生のことは、昔から我宗の學者達も間違へて居る樣に思ふ。それは安心全書を披いて見ると幾らも順次往生と云ふことが出て居るが、多くは誤解して居るので分かる。元來、順次往生と云ふことは、必ずしも未來に阿彌陀佛の淨土に往生することには限らないのである。然るに古來の學者は多く、淨土門の往生のやう

に解釈して居りますが是れは間違つて居るのであります。私の考は一言に之を言ふと、高祖大師の御教義と宗祖大師の御教義とは少しも違はないと云ふのであります。順次往生と云ふを、特に興教大師が精しく御書きになつた理由は、其の當時、順次往生の思想が漸く盛になり掛けて居たが、それは極めて淺薄なる教義であつて、僅に入道の方便として取扱はれて居つたのである。其れで眞言宗の人などからは、たゞ愚夫愚婦に對する一種の方便であると云ふやうに取扱はれて、一向に重きをなして居なかつたのである。所が興教大師はさう云ふ風に淺薄に解釈すべき者でない、順次往生も眞言宗で言ふ即身成佛と違はないと云ふことを御説きになつたのが頓悟往生秘觀であります。それであるから、順次往生と云ふことは名目は淨土門の往生のやうでありますが、其實を言へば即身成佛の事である。詰り興教大師は、弘法大師の即身成佛以外に、別の新説を御出しになつたものでないのであります。さうすると順次往生と現身往生との異りはどうかと云ふと、順次往生と云ひ現身往生と云ひ、往生と云ふことは「往いて生れる」であるから誰も西方淨土に往生することゝ思ひますが、さうでない。依報の國土に約して云つたから往生と云つたので、正報の人體に就て言へば成佛と云ふのである。今吾々が即身成佛して此土が密嚴淨土になれば、吾々は密嚴淨土に往生したのである。是は依身に約して云へば成佛と云ひ得るが、國土に約して云へば往生と云はなければならぬから往生と云つた迄である。要するに順次往生と云ふことも、矢張り即身成佛と云ふ事である、それが現身往生と異る所は、現身往生と云ふのは釈迦牟尼佛の如く、弘法大師の如く、此世に現に成佛をせられた、自覺他覺行圓滿の人を云ふのである。即ち成佛以後に化他の方便を實地に行はれた人が現身往生である。順次往生と云ふのは修行も碌々しない、或は修行はしても極めて不眞面目であつたり、或は其他の事情の下に成佛をしなかつた人が、最後臨終の一念の時に成佛する者を云つたのである。故に興教大師は、懈怠修行の者は、順次往生を期すと仰せられたのであります。要するに安心に就ては興教大師の思召も、弘法大師と少しも異つて居ないと云ふ事を御承知を願ひたい。

さうすると先づ大體、眞言宗の安心は、即身成佛と云ふことである。是れを實際に實現なされたのが即ち悉陀太子、弘法大師、興敎大師である、と云ふことを御話しましたが、是の敎義が、日本現代の思潮に對してどう云ふ關係があるかと云ふと、佛敎が日本に傳つて來た、最初の時代は渾沌として能く其實情が分らないけれども、彼の聖德太子が初めて佛敎と國政とを調和せられて、日本全國に國分寺を建てられ、又國分尼寺を建てるやうになつたのは、詰り佛敎を以て國家を治めると云ふことが、最も明瞭に天下に發表せられた時であります、然しそれが弘法大師の時に至るまでは、未だ十分に能く調和せられて居なかつて、唯無理に押付けたやうな風になつてゐたのであります。弘法大師が眞言密敎を日本に流布せられた意味は、即ち是までの佛敎のやり方では、恰も藥の能書を病人の所へ行つて大きな聲をして讀むのと同じことである。だから病人は喧いばかりで癒りはしないのであるから速にさう云ふことはやめて、病人には藥を飲ますことをしなければならぬ。藥を飲ますと云ふことは、即ち眞言の儀

軌法則に依て、建壇修法をすることである。それでなければ病人は癒りはしない。即ち天下泰平、國家安全の目的は、眞言密敎の修法に依らなければ擧げ得るものでないと云ふことを、非常に力說せられたのである。さうして總ての眞言宗の仕事が、悉く鎭護國家を本とすると言ふことになつたのであります。其事は大體、前に御話したやうな譯でありますそこで一體、今日の危險思想と云ふにも種々ありませうが、人に依つて皆違つてゐるやうであります。或方面に於ては此の日本の現狀其儘を維持しなければならぬ、少しでも改革を加へるやうなことは矢張り危險思想であるといふやうに非常に臆病に考へてゐる人もある。或は又極端なる改革を容認してゐる人もあるやうである。然し私が考へでは日本の現在が完全無缺の黃金世界であるとは何人も見てはゐないだらうと思ふ。或點は十分改良しなければならぬこともあるだらう。又、新に施設しなければならぬこともあるだらうと思ひます。そふすると眞の危險思想と認めなければならぬのは何であるかと云ふと、非國家主義であらうと思ふ。國家の存立を

破壞する思想は最も恐るべき思想である。此思想は國家としても恐るべきことであり國民としても恐るべきことであるが、特に宗教家として非常に恐るべきことであります。今日、露西亞の現狀を聞くと、宗教家などは全く人類を以て律して居ない。先日も過激派の連中が有る處で、牝馬を持つて來て、宣教師と結婚をさせるから、皆讃美歌を唱へろと云ふことで、大勢が高德の宣教師と牝馬とを列べて、讃美歌を歌つたと云ふことが新聞に出て居ります。詰り國家を破壞して自己の空想を實現しやうと云ふ、さう云ふ思想の人には、宗教の必要と云ふ者は殆ど解する事が出來ないのである。であるから諸君も宗教家として世に立たれる以上は、どうしても非國家主義に對して、國家のため國民の爲め、乃至、自己の爲にも、十分努力して、之を防禦しなければならぬであらうと思ふ。それが眞言宗の教義から云へば、非常に明瞭な必要な事である。眞言宗の卽身成佛と云ひ、此土卽密嚴と云ふ意味は、此世界を離れて他に黃金世界を求めないのであるから、此國家をどこまでも擁護して、此國家の上に密嚴世界を實現しなければならぬ

のである。弘法大師が別に御身を惜しまれた譯でなくして、生きながら入定留身せられたと云ふことは、固より衆生濟度の御誓願に由るのでありますけれども、亦一面から觀察すると、此國家の爲に肉身も大切にしなければならぬ、是の肉身が佛になるのである、此の世界が卽ち極樂世界である、と云ふことを實際に御示しになつたものであると、觀ることが出來るのであります。

諸君が愈々是から實地社會に立つて、思想問題に就て健鬪せらるゝに付ては、十分密教の教義を咀嚼せられて、さうして之を實地に活現せらるゝことを希望する次第であります。それに付て私は思想問題に對する若い坊さんの演說を聽いたことがあるが、頗る上は調子で、殆ど賴まれたからやつて居るといふやうに聽えた。是は眞實に危險思想の恐るべきことを自覺して居ない爲だらうと思ひます。非國家思想は我々宗教家に對しても實に恐るべき危險思想である。我々は國家に對しても、祖師に對しても、非國家主義に向つては、極力防禦の位置に立たなければならぬと云ふことを申述べて

置きます。此事に付て、眞宗の故利井老師の話されたことがある。利井老師の言はれたのに、自分は若い時に洪水に出遭つたことがあるが、其の時に他の人々はそれ着物を出せとか、金を出せとか、さう云ふことばかり言つて騒いで居るから、さう云ふことは止せ、着物などは何でもない、速く米俵を持つて行つて堤防の切れぬやうに防げ、さうすればさう云ふ物は自ら助かるのであると言つた。所が中にそれもさうだと云つて、米俵を持つて行つて堤防に當てる者もあれば、或は木を伐つて防ぐ者もあつたが、結局、其努力が功を奏して堤防は切れなかつた。さうすると總ての物が悉く安全になつた。幾らか米は濡れたが、出した物も出さなかつた物も總て安全であつた。それで自分は深く思つた、成るほど國家と云ふものは堤防の如きものである。國家と云ふ堤防が破れて仕舞へば幾ら着物を出して置いても、道具を出して置いても皆流され仕舞ふ。それであるから互に力を盡して堤防さへ崩さないやうにして置けば、出した品物も出さない品物も皆難を免れることになる。我々宗教家が自分の事を思うて、國家の事を忘れると……忘れる譯ではないが疎かにすると、丁度女どもが種々化粧の道具とか、或は美しい着物なぞを擔ぎ廻はつて居る中に洪水が來て、出した物も出さぬ物も、共に流して仕舞ふやうなことになるから、國家を擁護すると云ふことには、全力を傾注しなければならぬ。と云ふことを自分の實驗談から御話がありましたが、私は非常に老師の話を面白く傾聽したのであります。

要するに今日の危險思想と云ふことにも種々ある、或は資本家が自己の利益の減少することを恐れると云ふやうなこと或は或階級に高く留つて居る者が、其階級の破壞されることを危險思想だと認める人もありませうが。私はさう云ふやうなことは或時代に至れば、改革し廢止すべきものは廢止して行つて差支なからうかと思ひます。唯國家を破壞する、即ち堤防が切れると云ふことは最も恐るべきことでありまして、此點に就て諸君が十分御盡力下されたならば、今日の如き國家非常のときに際して大に國家社會に貢献することを得ると同時に自然諸君の傳道講習の目的をにも契ふことゝ

確信する次第であります。

密教と現代思潮終

大正九年二月廿六日印刷
大正九年三月　五　日發行　　定價貳拾五錢

編輯人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　豐山派宗務所教學部
右代表者　湯澤龍岳

發行人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　市橋本實

印刷人　東京市神田區表神保町一番地　安田德治郎

印刷所　東京市神田區表神保町一番地　健捷堂印刷所

發行所　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　新興社
振替東京四五八〇三番

290
28

終